心身障害学研究　Bull. Spec. Educ.
10(2)：73—85，1986

自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅶ(1)
——自閉症児の普通学級適応についての検討——

佐竹　真次*　園山　繁樹*　前川　久男　有松　慶子**　神保　昌之***
中山　義光****　針替　光幸*****目時　幸******
矢野　純子*******小林　重雄

幼児期に治療教育・訓練を受けた後小学校普通学級に入学し，その後中学校普通学級に入学した自閉症児6名についての7年目の報告である。本研究では，主にP-Fスタディ（5名に実施可能）の結果を検討した。その結果，1）GCR（集団適応度）は29%から75%と範囲が広く，個人差が大きい，2）GCRとIQ，SQとの間には一定の関係はみられない，3）人や物に対する直接的な攻撃傾向は高くない，4）寛容の精神，他を弁護する傾向が低い，5）これらの一般的傾向の他に，各対象児ごとに特有の反応傾向（自罰的，不平・失望，相手への解決要求）がみられる，といった特徴が明らかになった。また，P-Fスタディの評定が不能であった1名については，自閉症児に特有の病理症状が顕著に残存していた。

キーワード：自閉症児　追跡研究　学校適応　P-Fスタディ

1．問題と目的

幼児期に治療教育・訓練（行動療法）を受けた後，小学校普通学級に入学した自閉症児の学級適応について，我々は1年毎にその経過を報告してきた（板垣ほか，1979；山根ほか，1980；板垣ほか，1981；園山ほか，1983；園山ほか，1984；園山ほか，1985）。これらの子どもたちは今年(1984)中学校普通学級に入学した。したがって，第7報である本報は中学校第1学年時の報告である。

前報（園山ほか，1985；小林ほか，1983）では，田中ビネー知能検査，グッドイナフ人物画知能検査，絵画語彙検査，ITPA，S-M社会生活能力検査，教研式観点別到達度学力検査，および母親へのインタビューを実施し，その結果について報告した。そして，総体的にDAMのMAとPLA，SAが低い；ITPAの表現能力（ことばの表現，動作の表現）が相対的に低い；社会生活能力のうち「集団参加」および「意志交換」のSAが相対的に低い，などの諸点が明らかにされた。また，園山ら（1985）は，特に「集団参加」と「意志交換」領域の社会生活能力の低さを重視し，各領域のうちどのような技能の習得が困難であるかを明らかにした。それらの技能とは，複雑なルールが関連する技能，自主性に基づく技能，「思いやり」のある技能，相手の立場を考える必要のある技能，などであった。

ところで，これらの技能のうち後3者は児童の人格的側面とも深くかかわっているように思われる。また，これまで自閉症児の人格的傾向について詳細に論じられたことはほとんどなかった。そこで本報では，P-Fスタディの検査結果を中心に報告し，対象児の人格的特徴と社会生活能力および知能等との関係を検討する。

*　心身障害学研究科　**　研究生　***　水上町立水上中学校　****　八千代町立中結城小学校　*****　猿島町立猿島中学校　******　松戸市立常磐平第二小学校　*******　松山市立津田中学校

2．方　法

1．調査内容

対象児の性格的特徴を調べるために，欲求不満場面における反応傾向をみるP-Fスタディを，また家庭・学校での適応状況を調べるために，母親へのインタビューを実施した。さらに，算数の学習達成度を調べるために，教研式観点別到達度学力検査（CRT）の使用教科書に準拠したものを実施した。調査期間は昭和59年（1984年）8月である。

2．対 象 児

対象児は，小林の基準（1980）により自閉症と診断され，就学前に筑波大学知能障害研究室で指導を受けた児童である。昭和53年4月に小学校普通学級に入学した5名の中学1年生（普通学級）と，1年間の就学猶予の後昭和54年4月に小学校普通学級に入学した1名の6年生（H児）である。各児の概要は，Table 1．にまとめてある。各児のアルファベット記号は前報と同一である。また，各児のT-CLACサイコグラムは，前々報を参照されたい。

3．結　果

1．P-Fスタディのプロフィール

Table 2に，各児のP-Fスタディプロフィールが示されている。井原ら（1982）は7名の自閉症児にP-Fスタディを実施し，その反応のうち採点可能なものの割合をパーセンテージで示し，これをRe^{+}%とした。そしてRe^{+}%の平均は47.6%（範囲は83～0）であり，全体として約半数が採点可能であるにすぎなかった。今回の我々の調査では，Re^{+}%が100%のものが4名，87.5%のものが1名（A児），50%のものが1名（H児）であったので，H児を除く5名を分析の対象とした。ただし，

Table 1．対象児の概要

	対象児					
	A	B	C	D	E	H
性別・生年月	男子　1971,9	男子　1971,7	男子　1972,2	男子　1970,11	女子　1972,2	女子　1971,12
主　訴	他児と遊べない。落ちつきがない。指示に従えない。	言葉の遅れ	他児と遊べない。	言葉の遅れ。落ちつきがない。	言葉の遅れ。ひとり遊びが多い。	集団適応がよくない。先生の指示に従えない。
生育歴	熟産。吸引分娩 生下時体重 3,760g 始歩　11カ月 始語　9カ月	陣痛微弱。早期破水。吸引分娩 生下時体重 3,140g 黄疸が強かった 始語　12カ月	熟産。正常分娩 始歩　11カ月 始語　17カ月	熟産。正常分娩 生下時体重 2,800g 始歩　11カ月 始語　12カ月	熟産。早期破水 生下時体重 3,200g 始歩　10カ月 始語　42カ月	黄体ホルモン服用。帝王切開 生下時体重 3,400g 始歩　10カ月 始語　14カ月
大学での訓練期間	1年10カ月	2年5カ月	1年8カ月	2年4カ月	1年10カ月	3年7カ月
指導経過	1976,5-1977,9 個　別 1977,6-1978,2 小集団 1978,4- 家庭教師	1975,10-1977,9 個　別 1977,6-1978,2 小集団 1978,4-1982,3 家庭教師	1977,5-1978,2 個　別 1978,1-1978,12 小集団 1978,4-1983,3 家庭教師	1975,11-1977,2 個　別 1977,6-1978,2 小集団 1978,4-1984,3 家庭教師	1976,5-1977,9 個　別 1977,6-1978,2 小集団 1978,4- 家庭教師	1975,9-1979,3 個　別 1978,9-1979,3 小集団 1979,3- 家庭教師
就　学				1年猶予	情緒障害児学級に5年まで通級。普通学級では1年時のみ介助員がつく。	1年猶予。情緒障害児学級に通級。普通学級では介助員がつく。

A児についてはある程度の誤差が出ると思われるが，結果は近似値として容認することとした。GCR が標準以上の者は１名（C児）のみで，標準よりも幾分下回っている者が２名（D児，E児），標準よりも大幅に低い者が２名（A児，B児）であった。Table 3 には IQ と SQ および GCR が示されている。ただし，IQ と SQ は昭和58年度調査の結果（H児の IQ は昭和56年度調査の結果）である。

A児のプロフィール（Table ２－１）の解釈

1）GCR%は29%で，本少年の年齢の標準63%に比較してみると非常に低い。欲求不満に際しての反応は不適応的であることがわかる。

2）プロフィール欄をみると，E%は標準よりも低いが，E'については標準よりも高く，欲求不満場面に遭遇した場合に単なる不平，単なる失望に終始する傾向があり，一方，E，eは標準よりも低く，人に対する直接的な攻撃傾向や相

Table ２－１．A児のＰ－Ｆスタディプロフィール

(a) 場面別評点記入欄

	O－D	E－D	N－P
1		E	
2		I	
3		M	
4			e
5		M	
7 6		E	
－ 7	I'	I	
1/2 8		(I)	i
9			e
－ 10		I	i
7 11			m
＋ 12		(E)	
7 13			
14		I	
15	E'		
－ 16	E'	M	
－ 17			(m)
18	I'		
＋ 19		(I)	
－ 20		(M)	m
21		E	
＋ 22		(I)	
23	M'		
－ 24	E'		m

$GCR = \frac{3.5}{12} = 29\%$

(b) プロフィール欄

ゴヂ数字は平均
細数字は S. D.

	O － D		E － D		N － P		合 計	%
E	0	3	2	3	2	2	4	38
	3		1		0		4	
	Ⅰ 1.6 1.1 Ⅱ 1.8 1.0 Ⅲ 1.9 1.2 Ⅳ 1.9 1.0 (Ⅴ 1.9 1.1) Ⅵ 1.8 1.1		Ⅰ 6.0 3.9 Ⅱ 6.0 3.0 Ⅲ 6.5 2.3 Ⅳ 6.3 2.6 (Ⅴ 5.2 2.3) Ⅵ 5.0 2.3		Ⅰ 5.4 2.0 Ⅱ 4.7 1.6 Ⅲ 3.7 1.4 Ⅳ 3.5 1.4 (Ⅴ 3.3 1.4) Ⅵ 3.2 1.1		8	Ⅰ 54 19 Ⅱ 52 16 Ⅲ 50 13 Ⅳ 49 12 (Ⅴ 43 13) Ⅵ 42 12
I	1	2	2	5	1	1	4	38
	1		3		0		4	
	Ⅰ 1.4 0.9 Ⅱ 1.4 1.0 Ⅲ 1.1 0.9 Ⅳ 1.1 0.8 (Ⅴ 0.8 0.6) Ⅵ 0.6 0.5		Ⅰ 3.8 2.5 Ⅱ 3.8 2.3 Ⅲ 4.0 1.8 Ⅳ 4.1 1.5 (Ⅴ 4.3 1.6) Ⅵ 4.7 1.5		Ⅰ 0.3 0.7 Ⅱ 0.5 0.5 Ⅲ 0.8 0.6 Ⅳ 0.9 0.7 (Ⅴ 1.2 0.9) Ⅵ 1.4 0.9		8	Ⅰ 23 13 Ⅱ 24 9 Ⅲ 24 8 Ⅳ 25 10 (Ⅴ 26 8) Ⅵ 28 7
M	0	1	2	2	0	2	2	24
	1		0		2		3	
	Ⅰ 1.8 1.4 Ⅱ 1.5 1.7 Ⅲ 1.4 1.6 Ⅳ 1.6 1.1 (Ⅴ 1.9 1.4) Ⅵ 1.9 1.5		Ⅰ 1.6 1.4 Ⅱ 2.7 1.6 Ⅲ 2.3 1.6 Ⅳ 2.3 1.4 (Ⅴ 2.6 1.5) Ⅵ 2.8 1.5		Ⅰ 2.1 1.5 Ⅱ 2.1 1.4 Ⅲ 2.4 1.3 Ⅳ 2.4 1.3 (Ⅴ 2.7 1.3) Ⅵ 2.6 1.3		5	Ⅰ 23 12 Ⅱ 24 10 Ⅲ 26 10 Ⅳ 26 11 (Ⅴ 30 12) Ⅵ 30 10
合計	1	6	6	10	0	5	21	
	5		4		2			
%	29		48		21			Ⅰ ＝ 幼稚園 Ⅱ ＝ 小1.2 Ⅲ ＝ 小3.4 Ⅳ ＝ 小5.6 Ⅴ ＝ 中1.2 Ⅵ ＝ 中3.
	Ⅰ 20 10 Ⅱ 20 12 Ⅲ 18 9 Ⅳ 19 7 (Ⅴ 20 8) Ⅵ 18 8		Ⅰ 48 15 Ⅱ 50 13 Ⅲ 53 12 Ⅳ 52 11 (Ⅴ 51 10) Ⅵ 52 10		Ⅰ 32 8 Ⅱ 30 10 Ⅲ 28 10 Ⅳ 28 10 (Ⅴ 30 11) Ⅵ 30 8			

(c) 超自我因子欄

E＝0 ＝0 %	Ⅰ 7 7	Ⅱ 5 6	Ⅲ 7 6	Ⅳ 6 5 (Ⅴ 5 5) Ⅵ 4 4
I＝1 ＝4 %	Ⅰ 1 4	Ⅱ 4 4	Ⅲ 5 4	Ⅳ 7 5 (Ⅴ 9 5) Ⅵ 10 5
E＋I＝1 ＝4 %	Ⅰ 8 7	Ⅱ 9 6	Ⅲ 12 7	Ⅳ 13 7 (Ⅴ 13 6) Ⅵ 15 7
E－E＝3 ＝13 %	Ⅰ 18 13	Ⅱ 20 13	Ⅲ 20 12	Ⅳ 20 11 (Ⅴ 18 12) Ⅵ 17 10
I－I＝3 ＝13 %	Ⅰ 15 10	Ⅱ 12 8	Ⅲ 12 7	Ⅳ 10 8 (Ⅴ 9 7) Ⅵ 10 7
M＋I＝3 ＝13 %	Ⅰ 25 14	Ⅱ 28 13	Ⅲ 30 12	Ⅳ 33 11 (Ⅴ 39 12) Ⅵ 41 12

(d) 反応転移分析欄

1. なし
2. なし
3. なし
4. なし
5. $\xrightarrow{-0.67}$ O-D

手に解決を求めたりする傾向が低いことを示している。また，I'についても標準より高く，欲求不満場面に遭遇した場合の不平，失望は必ずしも外に表わさず，抑えて表明しないこともある。いいかえれば内にこもる反応も多くみられる。一方，自責，自己非難の反応であるI，不満を起した原因を自分に求め，自分の努力によって問題を解決しようとする反応であるiは標準に近い。無罰傾向を示すM%は標準よりもかなり低く，寛容の精神，社会成熟度の低さを示している。

3）反応の転移は障害優位傾向が後半になるに従って多くなってきているのみで，他の転移はみられない。

4）超自我因子欄をみると，E%が低く，負わされた罪が不当である場合にも積極的に攻撃し得ないことを示す。E＋I%も低すぎ，自我を一応主張し自分を積極的に守ることのできないことを意味し，精神発達，社会性の発達がおくれていることを示す。M＋I%もかなり低く，他を弁護する傾向のM，自己を弁護する傾向のIがともに低いと考えられることから，社会性，精神発達のおくれを示している。

5）本少年の場合は24場面中，第6，第11，第13場面においてあいまいな反応をし，これに関しては分析が不能であった。したがって，結果には幾分かの歪みが出たと考えられるが，本少年は不平や失望を抱きやすい単純なタイプの精神発達遅滞児に近い。

B児のプロフィール（Table 2－2）の解釈

1）GCR%は33%で，本少年の年齢の標準63%に比較してみると非常に低い。欲求不満に際しての反応は不適応的であることがわかる。

2）プロフィール欄をみると，E%がかなり高い。とくにE'が著しく高く，欲求不満場面に遭遇した場合に単なる不平，単なる失望に終始する傾向があり，またeも比較的高いことから相手に解決を求める傾向もみられる。I%はおおむね標準に近く出ているが，iに関しては低く，不満を起した原因を自分に求め，自分の努力によって問題を解決しようとする傾向の低いことがわかる。無罰傾向を示すM%は標準よりもかなり低く，寛容の精神，社会成熟度の低さを示している。

3）反応の転移も前半から後半にうつるにしたがって，単なる不平や失望に終始する傾向のE'および直接的な敵意を示すEを避ける傾向がうかがわれる。

4）超自我因子欄をみると，I%が著しく低く，一応悪いと思いながらもあれこれと言いのがれ，言いわけをして自己を弁護するといった傾向が非常に低いことがわかる。またE＋I%も低く，一応自我を主張し自分を積極的に守ることのできないことを示し，精神発達，社会性の発達の遅れていることがうかがえる。E－E%も低く，素朴な攻撃傾向は高くないことがわかる。I－I%は標準よりもかなり高い。I－I%は自責，自己非難の気持ちの強さに関係するものであるが，本少年の場合は本当に自責，自己非難の気持ちが強すぎるというよりも，I%の自己弁護能力が極端に低いためにI－I%の数値が不当に高くなってしまったものと思われる。M＋I%は標準よりも顕著に低く，このことは，他を弁護する傾向(M)および自己を弁護する傾向（I）がともに低いことを意味し，したがって，社会性，精神発達の低さを示している。

5）本少年の場合は不平や失望を抱きやすい，単純なタイプの精神発達遅滞児に近い。

C児のプロフィール（Table 2－3）の解釈

1）GCR%は75%で，本少年の年齢の標準63%に比較してみるとかなり高いことがわかる。すなわち欲求不満の際の反応は普通以上であり社会適応性は高い。GCR評点と合致している場合をよく吟味してみると、合致を示した9つの中，超自我阻害場面の合致が4　1/2で，75%の中37.5%までをこれが占めている。このことは，超自我意識が適度に高く，叱責をうけたり非難されたりした時には十分な自責の念を抱いて適応しようとすることを示している。

2）プロフィール欄をみると，E%がかなり低く，社会に適応するために必要な適度の攻撃性に欠けることがうかがわれ，かつI%が相当多く出て必要以上に自罰的な気持ちが強いことがうかがわれる。

3）反応の転移も前半はIを強調し，自罰的な気持ちを抱いていたが，後半はそれを表明することを避けている傾向がうかがわれる。また，前半に表明していた外罰的傾向Eを避け，無罰的傾向のMの反応に移っている。

4）超自我因子欄はほぼ標準的であった。

Table 2－2．B児のP－Fスタディプロフィール

(a) 場面別評点記入欄

	O－D	E－D	N－P
1	E′		
2			e
3		E	
4	E′		
5	E′		
－6		E	e
－7		I	e
－8		E I	i
9	E′		
－10	M′	I	
＋11			m
＋12		E	
13		I	
14		I	
15	I′		
－16	E′	M	
－17		M	m
18			e
＋19		I	
－20		M	e
21		E	
＋22		I	
23		M	
－24		I	m

$GCR = \frac{4}{12} = 33\%$

(b) プロフィール欄

ゴチ数字は平均
細数字は S. D.

	O－D	E－D	N－P	合計	%
E	4 / 1 / 5 Ⅰ 1.6 1.1 Ⅱ 1.8 1.0 Ⅲ 1.9 1.2 Ⅳ 1.9 1.0 Ⅴ 1.9 1.1 Ⅵ 1.8 1.1	3 / 1 / 4 Ⅰ 6.0 3.9 Ⅱ 6.0 3.0 Ⅲ 6.5 2.3 Ⅳ 6.3 2.6 Ⅴ 5.2 2.3 Ⅵ 5.0 2.3	3 / 2 / 5 Ⅰ 5.4 2.0 Ⅱ 4.7 1.6 Ⅲ 3.7 1.4 Ⅳ 3.5 1.4 Ⅴ 3.3 1.4 Ⅵ 3.2 1.1	10 / 4 / 14	58 Ⅰ 54 19 Ⅱ 52 16 Ⅲ 50 13 Ⅳ 49 12 Ⅴ 43 13 Ⅵ 42 12
I	0 / 1 / 1 Ⅰ 1.4 0.9 Ⅱ 1.4 1.0 Ⅲ 1.1 0.9 Ⅳ 1.1 0.8 Ⅴ 0.8 0.6 Ⅵ 0.6 0.5	0 / 5 / 5 Ⅰ 3.8 2.5 Ⅱ 3.8 2.3 Ⅲ 4.0 1.8 Ⅳ 4.1 1.5 Ⅴ 4.3 1.6 Ⅵ 4.7 1.5	0 / 0 / 0 Ⅰ 0.3 0.7 Ⅱ 0.5 0.5 Ⅲ 0.8 0.6 Ⅳ 0.9 0.7 Ⅴ 1.2 0.9 Ⅵ 1.4 0.9	0 / 6 / 6	25 Ⅰ 23 13 Ⅱ 24 9 Ⅲ 24 8 Ⅳ 25 10 Ⅴ 26 8 Ⅵ 28 7
M	1 / 0 / 1 Ⅰ 1.8 1.4 Ⅱ 1.5 1.7 Ⅲ 1.4 1.6 Ⅳ 1.6 1.1 Ⅴ 1.9 1.4 Ⅵ 1.9 1.5	0 / 2 / 2 Ⅰ 1.6 1.4 Ⅱ 2.7 1.6 Ⅲ 2.3 1.6 Ⅳ 2.3 1.4 Ⅴ 2.6 1.5 Ⅵ 2.8 1.5	1 / 0 / 1 Ⅰ 2.1 1.5 Ⅱ 2.1 1.4 Ⅲ 2.4 1.3 Ⅳ 2.4 1.3 Ⅴ 2.7 1.3 Ⅵ 2.6 1.3	2 / 2 / 4	17 Ⅰ 23 12 Ⅱ 24 10 Ⅲ 26 10 Ⅳ 26 11 Ⅴ 30 12 Ⅵ 30 10
合計	5 / 2 / 7	3 / 8 / 11	4 / 2 / 6	24	
%	29 Ⅰ 20 10 Ⅱ 20 12 Ⅲ 18 9 Ⅳ 19 7 Ⅴ 20 8 Ⅵ 18 8	46 Ⅰ 48 15 Ⅱ 50 13 Ⅲ 53 12 Ⅳ 52 11 Ⅴ 51 10 Ⅵ 52 10	25 Ⅰ 32 8 Ⅱ 30 10 Ⅲ 28 10 Ⅳ 28 10 Ⅴ 30 11 Ⅵ 30 8		Ⅰ ＝ 幼稚園 Ⅱ ＝ 小1.2 Ⅲ ＝ 小3.4 Ⅳ ＝ 小5.6 Ⅴ ＝ 中1.2 Ⅵ ＝ 中3.

(c) 超自我因子欄

E＝1＝.4 %	Ⅰ 7 7	Ⅱ 5 6	Ⅲ 7 6
	Ⅳ 6 5	Ⅴ 5 5	Ⅵ 4 4
I＝0＝0 %	Ⅰ 1 4	Ⅱ 4 4	Ⅲ 5 4
	Ⅳ 7 5	Ⅴ 9 5	Ⅵ 10 5
E＋I＝1＝4 %	Ⅰ 8 7	Ⅱ 9 6	Ⅲ 12 7
	Ⅳ 13 7	Ⅴ 13 6	Ⅵ 15 7
E－E＝2＝8 %	Ⅰ 18 13	Ⅱ 20 13	Ⅲ 20 12
	Ⅳ 20 11	Ⅴ 18 12	Ⅵ 17 10
I－I＝5＝21 %	Ⅰ 15 10	Ⅱ 12 8	Ⅲ 12 7
	Ⅳ 10 8	Ⅴ 9 7	Ⅵ 10 7
M＋I＝2＝8 %	Ⅰ 25 14	Ⅱ 28 13	Ⅲ 30 12
	Ⅳ 33 11	Ⅴ 39 10	Ⅵ 41 12

(d) 反応転移分析欄

1. E′ ←(+0.60)
2. E ←(+0.50)
3. なし
4. E ←(+0.43)
5. O-D ←(+0.43) ; N-P ←(+0.33) ; O-D →(−0.45) E-D

5）性格的には比較的バランスがとれており，社会適応は一応よくできていると思われる。ただし，適度の攻撃性に欠け，自罰的な気持ちが必要以上に強い。

D児のプロフィール（Table 2－4）の解釈

1）GCR%は54%で，本少年の年齢の標準63%に比較してみるとかなり低いことがわかる。すなわち，欲求不満の際の反応は正常なものとはいえず，社会適応性は低い。しかし，GCR 評点と合致している場合をよく吟味してみると、合致を示した6　1/2の中,超自我阻害場面の合致が4　1/2で,54%の中37.5%までをこれが占めている。このことは，超自我意識が高く，叱責をうけたり非難されたりした時には強い自責の念を抱いて適応しようとすることを示している。

2）プロフィール欄をみると，E%が高くM%が低いことが標準に照して判明する。しかもE%の高い原因はeの強調に起因する。eは欲求不

Table 2－3．C児のP－Fスタディプロフィール

(a) 場面別評点記入欄

	O－D	E－D	N－P
1		E	
2		E	e
3		M	
4	E′		
5			i
＋6		E	
＋7		I	
½8		I	~~i~~
9		E	
＋10		(I)	
＋11			(m)
＋12		(E)	
13			i
14		E E	
15	I′		
－16	M′	~~M~~	e
＋17			(m)
18		E	
－19		~~I~~	i
＋20		(M)	
21		E	
＋22		(I)	
23	M′		
½24		i	(m)

GCR $=\frac{9}{12}=75\%$

(b) プロフィール欄

ゴヂ数字は平均
細数字は S. D.

	O－D		E－D		N－P		合計	%
E	1 / 0	1	4.5 / 2.5	7	0.5 / 0.5	1	6 / 3	38
	Ⅰ 1.6 1.1 Ⅱ 1.8 1.0 Ⅲ 1.9 1.2 Ⅳ 1.9 1.0 Ⅴ 1.9 1.1 Ⅵ 1.8 1.1		Ⅰ 6.0 3.9 Ⅱ 6.0 3.0 Ⅲ 6.5 2.3 Ⅳ 6.3 2.6 Ⅴ 5.2 2.3 Ⅵ 5.0 2.3		Ⅰ 5.4 2.0 Ⅱ 4.7 1.6 Ⅲ 3.7 1.4 Ⅳ 3.5 1.4 Ⅴ 3.3 1.4 Ⅵ 3.2 1.1		9	Ⅰ 54 19 Ⅱ 52 16 Ⅲ 50 13 Ⅳ 49 12 Ⅴ 43 13 Ⅵ 42 12
I	0 / 1	1	3 / 1.5	4.5	1 / 2	3	4 / 4.5	35
	Ⅰ 1.4 0.9 Ⅱ 1.4 1.0 Ⅲ 1.1 0.9 Ⅳ 1.1 0.8 Ⅴ 0.8 0.6 Ⅵ 0.6 0.5		Ⅰ 3.8 2.5 Ⅱ 3.8 2.3 Ⅲ 4.0 1.8 Ⅳ 4.1 1.5 Ⅴ 4.3 1.6 Ⅵ 4.7 1.5		Ⅰ 0.3 0.7 Ⅱ 0.5 0.5 Ⅲ 0.8 0.6 Ⅳ 0.9 0.7 Ⅴ 1.2 0.9 Ⅵ 1.4 0.9		8.5	Ⅰ 23 13 Ⅱ 24 9 Ⅲ 24 8 Ⅳ 25 10 Ⅴ 26 8 Ⅵ 28 7
M	0 / 2	2	1 / 1	2	1 / 1.5	2.5	2 / 4.5	27
	Ⅰ 1.8 1.4 Ⅱ 1.5 1.7 Ⅲ 1.4 1.6 Ⅳ 1.6 1.1 Ⅴ 1.9 1.4 Ⅵ 1.9 1.5		Ⅰ 1.6 1.4 Ⅱ 2.7 1.6 Ⅲ 2.3 1.6 Ⅳ 2.3 1.4 Ⅴ 2.6 1.5 Ⅵ 2.8 1.5		Ⅰ 2.1 1.5 Ⅱ 2.1 1.4 Ⅲ 2.4 1.3 Ⅳ 2.4 1.3 Ⅴ 2.7 1.3 Ⅵ 2.6 1.3		6.5	Ⅰ 23 12 Ⅱ 24 10 Ⅲ 26 10 Ⅳ 26 11 Ⅴ 30 12 Ⅵ 30 10
合計	1 / 3	4	8.5 / 5	13.5	2.5 / 4	6.5	24	
%	17		56		27			Ⅰ ＝ 幼稚園 Ⅱ ＝ 小1.2 Ⅲ ＝ 小3.4 Ⅳ ＝ 小5.6 Ⅴ ＝ 中1.2 Ⅵ ＝ 中3.
	Ⅰ 20 10 Ⅱ 20 12 Ⅲ 18 9 Ⅳ 19 7 Ⅴ 20 8 Ⅵ 18 8		Ⅰ 48 15 Ⅱ 50 13 Ⅲ 53 12 Ⅳ 52 11 Ⅴ 51 10 Ⅵ 52 10		Ⅰ 32 8 Ⅱ 30 10 Ⅲ 28 10 Ⅳ 28 10 Ⅴ 30 11 Ⅵ 30 8			

(c) 超自我因子欄

E＝1.5＝ 6％ Ⅰ 7 7 Ⅱ 5 6 Ⅲ 7 6 Ⅳ 6 5 Ⅴ 5 5 Ⅵ 4 4

I＝2 ＝ 8％ Ⅰ 1 4 Ⅱ 4 4 Ⅲ 5 4 Ⅳ 7 5 Ⅴ 9 5 Ⅵ 10 5

E＋I＝3.5＝15％ Ⅰ 8 7 Ⅱ 9 6 Ⅲ 12 7 Ⅳ 13 7 Ⅴ 13 6 Ⅵ 15 7

E－E＝5.5＝23％ Ⅰ 18 13 Ⅱ 20 13 Ⅲ 20 12 Ⅳ 20 11 Ⅴ 18 11 Ⅵ 17 10

I－I＝2.5＝10％ Ⅰ 15 10 Ⅱ 12 8 Ⅲ 12 7 Ⅳ 10 8 Ⅴ 9 7 Ⅵ 10 7

M＋I＝8.5＝35％ Ⅰ 25 14 Ⅱ 28 13 Ⅲ 30 12 Ⅳ 33 11 Ⅴ 39 11 Ⅵ 41 12

(d) 反応転移分析欄

1. なし
2. I ←(+0.33)
3. なし
4. E ←(+0.33), (−0.38)→ M
5. (−0.5)→ O-D

満を他の人によって解決してもらおうとする，あるいは自分の方から救援，助力を求める傾向である。M，M′は他を弁護する傾向であるが，これが非常に乏しい。これに反してIはかなり強く，自己を弁護する傾向の強いことがわかる。

3）反応の転移は，前半から後半にうつるにしたがって自己防御（E－D）の傾向の表明を避けるようになったことのみがみられる。

4）超自我因子欄をみると，E％が著しく低く，負わされた罪が不当である場合にも積極的に攻撃し得ないことを示している。I％はかなり高く，自己保身的で，一応悪いと思いながらも，あれこれと言いのがれ，言いわけをなし，自分の失敗をなかなか認めようとしない傾向がある。M＋I％はかなり低く，このことは，他を弁護す

Table 2－4．D児のP－Fスタディプロフィール

(a) 場面別評点記入欄

	O－D	E－D	N－P
1		M	
2		E	
3		E	
4			e
5			e
－6		~~E~~	e
＋7		I	
½8		I	~~I~~
9		I	
－10		~~I~~	e
＋11			(m)
＋12		(E)	
13			e
14	M′		
15	E′		
－16		~~M~~	e
－17			e ~~M~~
18			e
＋19		I	
－20		~~M~~	e
21			e
＋22		(I)	
23			e
＋24			(m)

$GCR = \frac{6.5}{12} = 54\%$

(b) プロフィール欄

ゴヂ数字は平均
細数字は S. D.

	O－D		E－D		N－P		合計	%
E	0 / 1	1	3 / 0	3	4 / 7	11	7 / 8	62
	Ⅰ 1.6 1.1 Ⅱ 1.8 1.0 Ⅲ 1.9 1.2 Ⅳ 1.9 1.0 Ⅴ 1.9 1.1 Ⅵ 1.8 1.1		Ⅰ 6.0 3.9 Ⅱ 6.0 3.0 Ⅲ 6.5 2.3 Ⅳ 6.3 2.6 Ⅴ 5.2 2.3 Ⅵ 5.0 2.3		Ⅰ 5.4 2.0 Ⅱ 4.7 1.6 Ⅲ 3.7 1.4 Ⅳ 3.5 1.4 Ⅴ 3.3 1.4 Ⅵ 3.2 1.1		15	Ⅰ 54 19 Ⅱ 52 16 Ⅲ 50 13 Ⅳ 49 12 Ⅴ 43 13 Ⅵ 42 12
I	0 / 0	0	3 / 2	5	0 / 0	0	3 / 2	21
	Ⅰ 1.4 0.9 Ⅱ 1.4 1.0 Ⅲ 1.1 0.9 Ⅳ 1.1 0.8 Ⅴ 0.8 0.6 Ⅵ 0.6 0.5		Ⅰ 3.8 2.5 Ⅱ 3.8 2.3 Ⅲ 4.0 1.8 Ⅳ 4.1 1.5 Ⅴ 4.3 1.6 Ⅵ 4.7 1.5		Ⅰ 0.3 0.7 Ⅱ 0.5 0.5 Ⅲ 0.8 0.6 Ⅳ 0.9 0.7 Ⅴ 1.2 0.9 Ⅵ 1.4 0.9		5	Ⅰ 23 13 Ⅱ 24 9 Ⅲ 24 8 Ⅳ 25 10 Ⅴ 26 8 Ⅵ 28 7
M	0 / 1	1	1 / 0	1	1 / 1	2	2 / 2	17
	Ⅰ 1.8 1.4 Ⅱ 1.5 1.7 Ⅲ 1.4 1.6 Ⅳ 1.6 1.1 Ⅴ 1.9 1.4 Ⅵ 1.9 1.5		Ⅰ 1.6 1.4 Ⅱ 2.7 1.6 Ⅲ 2.3 1.6 Ⅳ 2.3 1.4 Ⅴ 2.6 1.5 Ⅵ 2.8 1.5		Ⅰ 2.1 1.5 Ⅱ 2.1 1.4 Ⅲ 2.4 1.3 Ⅳ 2.4 1.3 Ⅴ 2.7 1.3 Ⅵ 2.6 1.3		4	Ⅰ 23 12 Ⅱ 24 10 Ⅲ 26 10 Ⅳ 26 11 Ⅴ 30 12 Ⅵ 30 10
合計	0 / 2	2	7 / 2	9	5 / 8	13	24	
%	8		38		54			Ⅰ ＝ 幼稚園 Ⅱ ＝ 小1.2 Ⅲ ＝ 小3.4 Ⅳ ＝ 小5.6 Ⅴ ＝ 中1.2 Ⅵ ＝ 中3.
	Ⅰ 20 10 Ⅱ 20 12 Ⅲ 18 9 Ⅳ 19 7 Ⅴ 20 8 Ⅵ 18 8		Ⅰ 48 15 Ⅱ 50 13 Ⅲ 53 12 Ⅳ 52 11 Ⅴ 51 10 Ⅵ 52 10		Ⅰ 32 8 Ⅱ 30 10 Ⅲ 28 10 Ⅳ 28 10 Ⅴ 30 11 Ⅵ 30 8			

(c) 超自我因子欄

E＝0 ＝0 %	Ⅰ 7 7	Ⅱ 5 6	Ⅲ 7 6	Ⅳ 6 5 Ⅴ 5 5 Ⅵ 4 4
I＝3 ＝13 %	Ⅰ 1 4	Ⅱ 4 4	Ⅲ 5 4	Ⅳ 7 5 Ⅴ 9 5 Ⅵ 10 5
E＋I＝3 ＝13 %	Ⅰ 8 7	Ⅱ 9 6	Ⅲ 12 7	Ⅳ 13 7 Ⅴ 13 6 Ⅵ 15 7
E－E＝3 ＝13 %	Ⅰ 18 13	Ⅱ 20 13	Ⅲ 20 12	Ⅳ 20 11 Ⅴ 18 11 Ⅵ 17 10
I－I＝2 ＝8 %	Ⅰ 15 10	Ⅱ 12 8	Ⅲ 12 7	Ⅳ 10 8 Ⅴ 9 7 Ⅵ 10 7
M＋I＝7 ＝29 %	Ⅰ 25 14	Ⅱ 28 13	Ⅲ 30 12	Ⅳ 33 11 Ⅴ 39 11 Ⅵ 41 12

(d) 反応転移分析欄

1. なし
2. なし
3. なし
4. なし
5. E-D ← +0.56

る傾向（M）が低いことを意味し，したがって，社会性，精神発達の低さを示している。

5）本少年の社会適応性は標準以下ではあるが，極端に低いわけではない。ただし，他者依存的傾向がかなり高い。

E児のプロフィール（Table 2－5）の解釈

1）GCR%は50%で，本少女の年齢の標準63%に比較してみるとかなり低いことがわかる。すなわち欲求不満の際の反応は正常なものとはいえず，社会適応性は低い。しかし，GCR評点と合致している場合をよく吟味してみると、合致を示した6つの中，超自我阻害場面の合致が4 1/2で，50%の中37.5%までをこれが占めている。このことは，超自我意識が適度に高く，叱責をうけたり非難されたりした時には強い自責の念を抱いて適応しようとすることを示してい

Table 2－5．E児のP－Fスタディプロフィール

(a) 場面別評点記入欄

	O－D	E－D	N－P
1		E	
2			e
3		I	
4			i
5		M	
+6		(E)	
−7		~~E~~	i
1/2 8		~~E~~	(i)
9		E	
+10		(I)	
−11		E	~~m~~
+12		(E)	
13	E′		
14	M′		
15	I′		
−16		I M	
−17		M	~~m~~
18		E	
+19		I	
−20		~~M~~	m
21		E	e
+22		I	
23	I′		
1/2 24			i (m)

(b) プロフィール欄

ゴチ数字は平均
細数字は S. D.

	O－D		E－D		N－P		合計	%
E	0	1	5	6.5	1	1.5	6	37
	1		1.5		0.5		3	
	Ⅰ 1.6 1.1 Ⅱ 1.8 1.0 Ⅲ 1.9 1.2 Ⅳ 1.9 1.0 (Ⅴ 5.1 1.1) Ⅵ 1.8 1.1		Ⅰ 6.0 3.9 Ⅱ 6.0 3.0 Ⅲ 6.5 2.3 Ⅳ 6.3 2.6 (Ⅴ 5.2 2.3) Ⅵ 5.0 2.3		Ⅰ 5.4 2.0 Ⅱ 4.7 1.6 Ⅲ 3.7 1.4 Ⅳ 3.5 1.4 (Ⅴ 3.3 1.4) Ⅵ 3.2 1.1		9	Ⅰ 54 19 Ⅱ 52 16 Ⅲ 50 13 Ⅳ 49 12 (Ⅴ 43 13) Ⅵ 42 12
I	0	2	2	5	3	3.5	5	44
	2		3		0.5		5.5	
	Ⅰ 1.4 0.9 Ⅱ 1.4 1.0 Ⅲ 1.1 0.9 Ⅳ 1.1 0.8 (Ⅴ 0.8 0.6) Ⅵ 0.6 0.5		Ⅰ 3.8 2.5 Ⅱ 3.8 2.3 Ⅲ 4.0 1.8 Ⅳ 4.1 1.5 (Ⅴ 4.3 1.6) Ⅵ 4.7 1.5		Ⅰ 0.3 0.7 Ⅱ 0.5 0.5 Ⅲ 0.8 0.6 Ⅳ 0.9 0.7 (Ⅴ 1.2 0.9) Ⅵ 1.4 0.9		10.5	Ⅰ 23 13 Ⅱ 24 9 Ⅲ 24 8 Ⅳ 25 10 (Ⅴ 26 8) Ⅵ 28 7
M	0	1	1	2	0	1.5	1	19
	1		1		1.5		3.5	
	Ⅰ 1.8 1.4 Ⅱ 1.5 1.7 Ⅲ 1.4 1.6 Ⅳ 1.6 1.1 (Ⅴ 1.9 1.4) Ⅵ 1.9 1.5		Ⅰ 1.6 1.4 Ⅱ 2.7 1.6 Ⅲ 2.3 1.6 Ⅳ 2.3 1.4 (Ⅴ 2.6 1.5) Ⅵ 2.8 1.5		Ⅰ 2.1 1.5 Ⅱ 2.1 1.4 Ⅲ 2.4 1.3 Ⅳ 2.4 1.3 (Ⅴ 2.7 1.3) Ⅵ 2.6 1.3		4.5	Ⅰ 23 12 Ⅱ 24 10 Ⅲ 26 10 Ⅳ 26 11 (Ⅴ 30 12) Ⅵ 30 10
合計	0	4	8	13.5	4	6.5	24	
	4		5.5		2.5			
%	17		56		29			Ⅰ ＝ 幼稚園 Ⅱ ＝ 小1.2 Ⅲ ＝ 小3.4 Ⅳ ＝ 小5.6 Ⅴ ＝ 中1.2 Ⅵ ＝ 中3.
	Ⅰ 20 10 Ⅱ 20 12 Ⅲ 18 9 Ⅳ 19 7 (Ⅴ 20 8) Ⅵ 18 8		Ⅰ 48 15 Ⅱ 50 13 Ⅲ 53 12 Ⅳ 52 11 (Ⅴ 51 10) Ⅵ 52 10		Ⅰ 32 8 Ⅱ 30 10 Ⅲ 28 10 Ⅳ 28 10 (Ⅴ 30 11) Ⅵ 30 8			

(c) 超自我因子欄

E＝2 ＝8 % Ⅰ 7 7 Ⅱ 5 6 Ⅲ 7 6 Ⅳ 6 5 (Ⅴ 5 5) Ⅵ 4 4

I＝2 ＝8 % Ⅰ 1 4 Ⅱ 4 4 Ⅲ 5 4 Ⅳ 7 5 (Ⅴ 9 5) Ⅵ 10 5

E＋I＝4 ＝17 % Ⅰ 8 7 Ⅱ 9 6 Ⅲ 12 7 Ⅳ 13 7 (Ⅴ 13 6) Ⅵ 15 7

E－E＝4.5＝19 % Ⅰ 18 13 Ⅱ 20 13 Ⅲ 20 12 Ⅳ 20 11 (Ⅴ 18 11) Ⅵ 17 10

I－I＝3 ＝13 % Ⅰ 15 10 Ⅱ 12 8 Ⅲ 12 7 Ⅳ 10 8 (Ⅴ 9 7) Ⅵ 10 7

M＋I＝6.5＝27 % Ⅰ 25 14 Ⅱ 28 13 Ⅲ 30 12 Ⅳ 33 11 (Ⅴ 39 11) Ⅵ 41 12

(d) 反応転移分析欄

1. なし
2. E ←(+0.54)
3. i ←(+0.71)
4. E ←(+0.33), →(−0.56) M
5. なし

GCR＝ $\frac{6}{12}$ ＝ 50 %

Ⅰ 49 10 Ⅱ 52 10 Ⅲ 54 10 Ⅳ 58 9 (Ⅴ 63 10) Ⅵ 66 10

る。

2）プロフィール欄をみると，E％がかなり低く，社会に適応するために必要な適度の攻撃性に欠けることがうかがわれ，かつI％が非常に多く出て必要以上に自罰的な気持ちが強いことがうかがわれる。さらにM％もかなり低く，寛容の精神や社会成熟度の低さがうかがわれる。

3）反応の転移は，前半から後半に移るに従って，直接敵意を表明するE，自己反省を表明するiを避け，Mの反応に移っている。

4）超自我因子欄をみると，M＋I％がかなり低く，このことは，他を弁護する傾向(M)が低い

Table 3．IQとSQおよびGCR

	田中ビネー	社会生活能力	P-F スタディ
対象児	IQ	SQ	GCR
A	108	89	29
B	71	98	33
C	91	84	75
D	68	80	54
E	109	104	50
H	66	61	

※GCR の本対象児年齢における標準は63

ことを意味し，従って，社会性，精神発達の低さを示している。

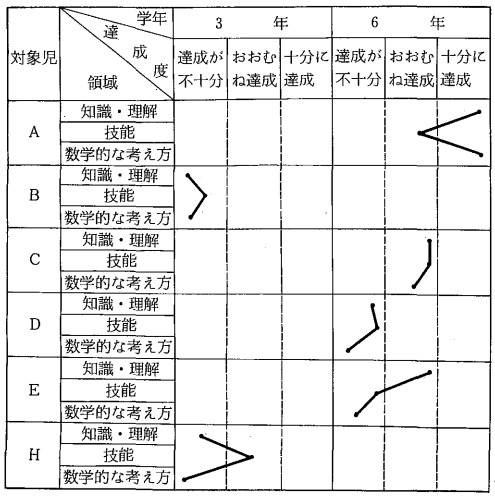
5）本少女の社会適応性は，標準以下ではあるが，極端に低いわけではない。しかし，適度の攻撃性に欠け，自罰的な気持ちが必要以上に強い。

2．母親へのインタビュー

Table 4 は母親へのインタビューの結果をまとめたものである。項目には，家庭生活に関すること，学校生活に関すること，および親が心配していることの3点を選んだ。

3．算数の学習達成度

Fig．1 は CRT（算数）得点のプロフィールである。前学年のレベルを達成していると考えられるのはA児とC児である。



Fig．1．CRT （算数）得点プロフィール

4．考　　察

1．P-F スタディの GCR%，プロフィール，超自我因子について

GCR は，Group Conformity Rating の略で，一般には集団一致度とか集団適応度とかいわれる。一口にいえば，どの程度に世間並の常識的な方法で適応することができるかを示す指標といえる。本研究の対象児は，普通学級に在籍する自閉症児であるという共通点を持つにもかかわらず，GCR 評点は29%から75%と範囲が広く，個人差が大きいことがわかった。すなわち，C児は75%で標準以上，D児，E児は標準以下で約50%，A児，B児は約30%であった。

GCR を IQ，SQ と比較してみる（Table 3）と，IQ，SQ がともに最も高いE児の GCR は50%で，5人中3番目である。一方，IQ が91で3番目，SQ が84で4番目であるC児の GCR は75%で，5人中最も高い。さらに IQ，SQ がともにC児よりも高いA児の GCR は29%で，5人中最も低い。このように，自閉症児の GCR は IQ，SQ と相関関係をもつものではないことがわかった。

プロフィール欄については，5人全員に関して，人や物に対する直接的な攻撃傾向（E）が標準的かまたは少ない。この一般的傾向に加えて，3名（A児，C児，E児）は，自罰的傾向（I%）が大きい；2名（A児，B児）は単なる不平，失望（E'）を抱きやすい；1名（D児）は相手に解決を求める傾向（e）が大きい，といった特徴がみられた。これらの特徴は，自主的行動をはばみやすいものと考えられ，前報（園山ほか，1985）で指摘された「自主性に基づく技能の習得の困難性」を改めて示唆するものと思われる。

また，もう一つの一般的傾向としては，標準的なC児を除く4名に関して，プロフィール欄の寛容の精神をあらわすM%，および超自我因子欄の M＋I%のうち，他を弁護する傾向の M がともに低く，他者に対する配慮，思いやりを欠くという特徴がみられた。このこともまた，前報で指摘された「『思いやり』のある技能の習得は困難」，「相手の立場を考える必要のある技能は習得が困難」という特徴と一致していると考えられる。

2．母親へのインタビューについて

友人関係では，特にA児，C児，H児に問題が

Table 4．母親へのインタビュー結果

対　象　児	A	B	C	D	E	H
1．家庭での生活のし方						
a．日曜日の使い方	午後は図書館へ行き，好きな雑誌，新聞，その他を読んで来る。	カセットで遊ぶ。電気店，スーパーに見に行く。 友人と横田基地を見に行く。	図書館へ行く。本読み。絵かき。本屋で立読み。好きな本は地理、乗り物，歴史など。	電車に乗って新宿などのテープ屋に行き，テープ（アニメの歌）を見る。 自転車乗り。テレビ（マッチ，としちゃんが好き）。	買物。弟とゲーム。手芸（ししゅう，人形作り）。	10月～6月，毎週プール。 7月～9月，家でゴロゴロ。
b．家でのお手伝い	畑の水やり，土おこし等。雨戸開閉，布団敷き上げ，買物。	風呂の水あけ。弟・妹の面倒を見る。買物。	食事の後片付け。スーパー，たばこ屋などにおつかい。床みがき。	夕食の料理運び。自分の布団ひき（たたむのはしない）。	買物（冷蔵庫を見て自分から必要なものを選び，スーパーで買ってくる）。布団の上げ下ろし。	食事の仕度，後片付け，食器洗い。洗濯（洗剤の量を加減できない）。そうじ（そうじ機で）。
c．お小遣いの使い方	自分の好きな物を買って食べる。全部使わず，貯金箱にいれる。	月に 2,500円。ほとんど貯金している。	やっていない。特に欲しいとは言わない。	やっていない。そのつど電車賃，ジュース・お昼代等を渡す。	必要なときだけやる。手芸品の材料などを買う。	やっていない。アイスクリームを買うときなど渡す。合計にピッタリのものを買ってくる。お年玉などポイポイ投げる。
2．学校での活動						
a．得意な教科	社会，数学	家庭科	社会，美術	英語，数学	英語，音楽	国語
b．役割（委員）	生活委員（学級）	飼育係，給食係，陸上部。空手道場に通っている（3級）。	美化委員，美術クラブ	理科係，将棋クラブ	清掃委員	保健係，学習係（号令係）
c．友人関係	2小学校の卒業生が一緒に入る中学校で，他校から来た友達にはよくばかにされたり，頭にこぶを作って来たりする。女子はよく面倒をみてくれる。	新しい（他の小学校からの）友達もできた。同じ小学校からの友達とは，放課後も行き来あり。	特に親しい友達はできていない。	小学校から仲のいい友達が数人いるが，最近はあまり遊びに来ない。ときどき友達と映画を見に行ったりする。	小学校のときからの友達が10人ぐらいいる。友達の家に行ったり，一緒に遊びに出たりする。	自分から積極的にかかわることはなく，周りの子どもたちが可愛がってくれる。人の好き嫌いがはっきりしている。

3．親として今心配していること	家でも一人でいるのが好きで，2階にすぐ上がって本，テレビなどを見ている。一つの事に長く集中することがむずかしい。異性に関心を持ちはじめた。親が話しかけないと何も話そうとしないが，自分に関係のないこと（テレビのニュース，野球等）は話すこともある。	公文式の算数など，レベルに合ったものは自分から進んでやっているので，特に心配はしていない。学校での学習は担任や専科の先生に任せている。	学校の勉強にこれからもスムーズについていけるか。	最近エッチになってきて，恥ずかしいことばを大人にも平気で言う。担任の先生がいちいち返事してくれるので，先生をかまいに行く。先生につばをかけることがある。日曜日の午後になると，欲求不満になってお父さんに小言を言う。	今の調子で行ってくれればよい。勉強（国・数など）は思ったよりやっている。	自傷，奇妙な笑い，ひとりごとなどが悪化しないか。羞恥心がない（特定の男の子に対してニヤニヤするなど）。特定の物や色を見れず，特定の音（コマーシャルなど）が聞けない。

みられる。A児ではP-FスタディのGCRも低いことから，友人関係の稀薄さも理解できるように思われるが，一方，GCRの高いC児の友人関係は必ずしもよくなく，逆にGCRがA児に近いB児の友人関係は良好である。このことは，投影法検査で得られた集団適応度が必ずしも良好な友人関係を約束するものではなく，それ以外の要因も関与していることを示唆している。たとえば，B児は3年生時の調査（板垣ほか，1981）において，感情表出や社会性での発達が顕著であると指摘されていた。このような感情表出や社会性とはどのようなものなのか。今後の検討課題としたい。

A児には，いわゆる「いじめ」の対象となる危険性があるように思われる。今後十分な経過観察と学校一家庭の密接な連絡とを続け，危険な事態に陥らないように配慮していかなければならない。

H児の友人関係の稀薄さは，まだ顕著にみられる自閉症状の影響によるものと思われる。彼女の場合，自閉症児特有の病理症状が明らかに残っており，これらの症状を緩和するための地道な訓練的指導が今後も必要であろう。

3．算数の学習達成度について

CRT（算数）において，前学年のレベルを達成していると考えられるのは，A児とC児である。1学期通知表の算数の評価は，A児3，C児2，E児2であった。しかし，A児では社会が4，C児では社会が3，E児では英語が4であり、それぞれに得意教科が異なっていた。一方，B児，H児では5年生（H児は4年生）当時と比較してほとんど進歩していなかった。D児では，5年生当時の達成度が1～2学年であったため，3，4年生用のテストを用いるべきであった。算数では特にB児，H児について，2，3年生レベルでのつまづきを解明しながら，系統的指導を行う必要があると思われる。

前回の調査では，社会生活能力の技能のうち，共通して習得が困難であるものがいくつか示唆された。さらに今回の調査では，各児の欲求不満場面における反応傾向が分析された。そして，それらは前報の結果と密接な関係をもつものであることがわかった。今後は，これらの結果に基づき，さまざまな欲求不満場面に遭遇した場合の対処のし方を計画的に指導することによって，複雑な社会生活に適応するためのスキルを身につけさせていく必要があると思われる。

付記　調査資料収集・整理に際し，教育研究科の兼光栄美さん，川口紹子さん，および人間学類の山下佳子さんに協力いただいたことを記して感謝します。

文　献

1）板垣健太郎，山根律子，太田千鶴子，藤原義博，掘之内高久，池弘子，小林重雄，長畑正道，斎藤義夫(1979)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅰ(2)――自閉症児の普通学級適応についての検討――，心身障害学研究，3，101―109.

2）板垣健太郎，藤原義博，財部盛久，野口幸裕，小山望，太田俊己，田村元郎，古川千賀子，打越実，飯島郁郎，笠井実，国谷時司，鈴木正彦，池弘子，小林重雄(1981)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅲ(1)――自閉症児の普通学級適応についての検討――，心身障害学研究，5(1)，1―11.

3）井原成男，河野洋二郎，庄司順一，帆足英一（1982)：P-FスタディとWISCへの反応からみた自閉症児のコミュニケーション特性，小児の精神と神経，22，2，105―110.

4）小林重雄　編著（1980)：「自閉症児――その臨床像と技法――」，川島書店.

5）小林重雄，前川久男，大野裕史，加藤哲文，園山繁樹，古田真理，武蔵博文，佐竹真次，平田幸宏，近藤明子，藤原義博(1983)：自閉性障害児の学校適応に関する追跡研究，安田生命社会事業団研究助成論文集，19，69―86.

6）園山繁樹，藤原義博，板垣健太郎，太田俊己，加藤悦子，松浦裕子，阿部義光，小野沢正俊，古内良勝，松本敬子，小林重雄(1983)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅳ(1)――自閉症児の普通学級適応についての検討――，心身障害学研究，7(1)，33―37.

7）園山繁樹，藤原義博，松浦裕子，加藤悦子，府川恵子，日浦伸祐，金子充夫，菊池一也，中沢要之，杉田忠夫，平野忠夫，小林重雄（1984)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅴ(1)――自閉症児の普通学級適応についての検討――，心身障害学研究，8(2)，31―37.

8）園山繁樹，佐竹真次，前川久男，有松慶子，磯和夫，幸田実，小山章子，李根梅，藤原義博，小林重雄(1985)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅵ(1)――自閉

症児の普通学級適応についての検討——，心身障害学研究，9(2)，105—111.
9）山根律子，太田千鶴子，板垣健太郎，藤原義博，財部盛久，池弘子，小林重雄(1980)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究II(1)——自閉症児の普通学級適応についての検討——，心身障害学研究，4(1)，82—91.

Summary

The Follow-up Studies on School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms VII(1)
——On Autistic Children in Regular Class——

Shinji Satake　Shigeki Sonoyama　Hisao Maekawa　Keiko Arimatsu
Masayuki Jinbo　Yoshimitsu Nakayama　Mitsuyuki Harigae　Sachi Metoki
Junko Yano　Shigeo Kobayashi

This is the seventh year report on the follow-up study of six autistic children with relatively high intelligence who are enrolled in the regular first year of junior high school (one of them is in sixth grade in elementary school).

In the present study, their P-F (Picture-Frustration) Study scores were examined. The following characteristics were identified: 1) GCR (Group Conformity Rating) ranged from 29% to 75%, indicating great individual difference; 2) No correlation was found between GCRand IQ or SQ; 3) Each subject's direct aggressiveness against people and objects was average or below; 4) Both generousness and mind to plead for others were below the average; 5) Besides those general tendencies (i. e., (3), (4)), each subject had some specific response tendencies (e. g., self-reproach, complaint & disappointment, request to others for a solution). One subject's P-F Study result was too incomplete to analyze, but she appeared to maintain the typical pathology of autism.

Key word: autistic children, follow-up study, school adjustment, R-F study